

② 「創造境界」の形成はヨコハマを変えたか

1 創造境界とは

クリエイティブシティ構想の中心的なプロジェクトとして、「創造境界の形成」がある。創造境界とは、歴史的建造物等を創造活動の拠点として活用し、その周辺にアーティストやクリエイターが創作・発表・滞在（居住）する創造境界を形成し、まちを活性化させるというものだ。

現在、「馬車道地区」「日本大通り地区」「桜木町・野毛地区」の3地区をモデル地区として進めており、バンカートから始まった創造拠点が、これまでの4年半の取組において、公設民営、民設民営、合わせて12余りへと拡がっている。（注1、写真1）

2 創造境界はどのようにして拡がっていったか

①すべての始まりはバンカート
平成16年1月の「文化芸術創造都市—クリエイティブシティ・ヨコハマの形成に向けた提言」（注2）と合わせ、「都心部歴史的建造物の文化・芸術実験事業」いわゆる「バン

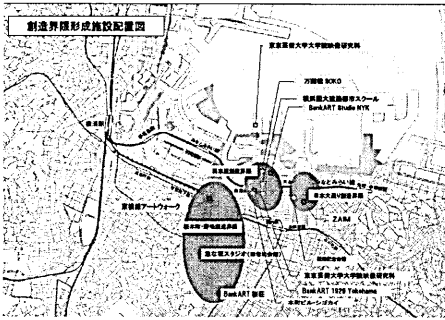


写真1 創造境界形成施設配置図

カート事業」の運営団体が発表された。前年に、旧第一銀行及び旧富士銀行を活用して「クリエイティブシティセンター」として運営する団体を公募、現在の BankART1929 が選考され、平成16年2月から18年3月までの実験事業が開始された。（17年1月より、旧富士銀行に代わり旧日本郵船倉庫を活用）（写真2、3）

バンカートの活動は、全国的に知られるところとなり、「東京藝術大学大学院映像研究科」の誘致、後述する「北仲ホワイト&ブリック」事業へとつながっていった。2年間の実験事業は、外部委員会において高く評価され、19年4月より本格実施となったわけである。



写真2 BankART 1929 Yokohama

新しいまちづくりへとつながっている。

②北仲ブリック&ホワイトから本町ビル45、ZAIMへ
再開発が予定されている北仲地区に、役割を終えた、築80年の建物が2棟あった。（写真4）この建物を、地権者である森ビルが、期間限定で安価でアーティストやクリエイターに貸し出し、創作活動の拠点として活用するプロジェクトが行われた。17年5月から18年10月までの1年半である。クリエイティブシティ構想の中心に位置するこの建物を活用して何かできないかという相談を森ビルからバンカートが受け、市がバック

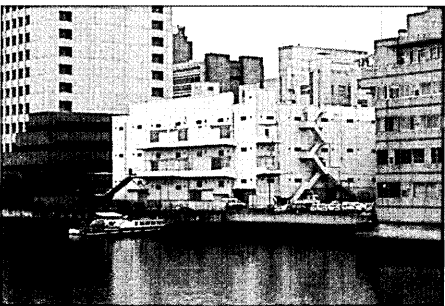


写真3 BankART Studio NYK

執筆

永井 由香

150周年・創造都市事業本部
創造都市推進課担当係長

（注1）

○馬車道創造境界：BankART 1929
Yokohama・BankART Studio
NYK・東京藝術大学大学院映像
研究科、東京藝術大学大学院ア
ニメ科、本町ビル45、万国橋SO
K
○横浜国立大学大学院建築都市
スクールYIGSA
○日本大通り創造境界：ZAIM
○桜木町・野毛創造境界：急な坂
スタジオ、創造空間9001、
BankART 桜荘、
野毛マリヤビルホワイト

（注2）

「文化芸術創造都市—クリエイティブシティ・ヨコハマの形成に向けた提言」については「①都市構想を立案する意義—創造都市横浜構想は未来社会の起点—」7頁（注9）参照

アップする形で実現したものだ。そして50組のアーティスト、クリエイターが入居した。

ここでは、それぞれが活動を行うだけでなく、「北仲オープン」というイベントを実施し、入居者たちが自身のアトリエやスタジオを一般公開し、入居者と市民、入居者同士との交流ができるようにした。残念ながら、18年10月で暫定活用は終了したが、この「北仲ブリック&ホワイト事業」は、横浜市においても大きな影響を与え、ZAIM、本町ビル45へとつながったと言える。

ひとつの拠点にアーティストやクリエイターが集積することによる発信性の高さや、クリエイターの集まりが新たなビジネスやコラボレーションを生み出すということが、「北仲ブリック&ホワイト事業」によって証明された。また、何よりもせっかく集まった約50組のアーティストやクリエイターが横浜から去ってしまうのは、クリエイティブシティに逆行するとの思いを強くした。この思いが、本町ビル45やZAIMへとつながっていったのである。

本町ビル45は、レンガ造りの事務所ビルで、バンカートのコーディネートにより、建

築家を中心に11組が入居している。

③ ZAIMアーティスト・クリエイターのみどり場、トリエンナーレサポーターの拠点
中区役所の隣、日本大通りの入り口に位置するZAIM（旧関東財務局・旧労働基準局）（写真5）は、14年に横浜市が取得し、「横浜トリエンナーレ2005」で、「トリエンナーレステーション」として活用された。現在は、トリエンナーレサポーターの拠点としての活用に加え、日本大通り創造界隈の中心的拠点として、本館は33組のアーティストやクリエイターが入居、活動を行っている。また、別館は、展示やワークショップなどのイベントスペースとして活用されている。行政の所有する建物をアーティストやクリエイターに貸し出すという試みは、画期的なことだといえる。バンカートと同様、運営団体を公募しようという考えもあったが、芸術文化振興財団が、アーティストやクリエイターを支援、育成していく機能を強化していくという考えがあり、財団に運営をまかせることとなった。

年に1回行われる「ZAIM de FESTA」は、「北

仲オープン」の精神を引き継いだものといえる。

④ 地域資源の活用Ⅱ急な坂スタジオ、創造空間9001
歴史的建造物だけでなく、空きオフィスや空き店舗などの活用となった地域資源を創造拠点に活用するという取組は、役割を終えた横浜市の施設においても検討された。職員寮や福祉施設、学校などさまざまな施設があった中で、野毛の坂の途中にあった結婚式場「老松会館」を現在、舞台稽古場の活動拠点として活用している。

これから、桜木町・野毛界隈の形成に着手していくことを踏まえ、どのような活用がよいのか検討した結果、都心部から少し場所が離れていること、完成な住宅街にあることを考慮し、東京や横浜で圧倒的に足りない「舞台芸術の練習場」として活用することとしたのである。運営は、横浜に限らず、広く募集を行った結果、アートネットワークジャパンとSTSスポットの連合、現在のNPO法人アートプラットホームが選考された。そして、18年10月に「急な坂スタジオ」が誕生したのである。（注3、写真6）

不用となった地域資源を活

用した拠点として、もう一つ「創造空間9001」がある。これは、旧東横線桜木町駅舎を改修して展示スペースとして活用したものだ。16年1月30日、みなとみらい線の開業に伴い、東急東横線横浜～桜木町間が廃線となった。上部は、自転車も通れる遊歩道として整備することが決定し、工事をすすめているが、地元では、「万里の長城」と呼ばれ、山側と海側を分断するいわば負の遺産として認識されていた。しかし、見方を変えれば、高架下の空間や壁面、旧桜木町駅舎は、他には例を見ない貴重な空間である。地域の活性化につながる可能性があるのではないかと、この思いから、地域関係者や有識者、近隣施設、行政からなる「東横線跡地懇談会」を設置、活用策について検討した。

高架下等の活用は方向性をとりまとめることで、懇談会は終了したが、旧桜木町駅舎は、19年9月から活用を開始した。21年度末までの暫定活用ではあるが、地域を中心とした利用が行われている。

⑤ 民設民営の取組Ⅱ万国橋S
OKO、横浜国大大学院建
築都市スクール
バンカート事業をはじめ、



写真4 北仲ブリック&ホワイト



写真5 ZAIM外観



写真6 急な坂スタジオ（旧老松会館）

（注3）
「急な坂スタジオ」については、「⑦② 急な坂スタジオの実験と挑戦」参照

これまでは公設民営の取組を紹介してきたが、ここで民設民営の取組を紹介したい。

万国橋のもとに万国橋SOKOという創造産業が入居した倉庫がある。海が見え、天井高があり、趣のある建物と、横浜に移転を希望する人のイメージどおりの建物である。現在、NHKのアニメ「ニャッキ！」で有名なクレイアニメ作家の伊藤有孝氏のスタジオやデザイン事務所、映像・ファッション系のクリエイターを養成する教育機関、世界的な建築家である山本理顕氏の設計事務所、横浜を代表する写真家の森日出男氏のスタジオなど、計6組が入居している。(写真7)

この建物は、当初は、倉庫業でしか貸さないと考えていたオーナーを横浜市が口説き、オーナーが耐震工事を行って、それぞれの入居者と5年間の定期借家契約を結んでいる。この事業で特筆したいのは、横浜市はオーナーに一銭もお金を出していないということである。民と民を結びつける、まさしくコーディネートにより、アーティストやクリエイターの集積を図ったのである。

YIGSAがある。クリエイティブシティ構想の中心地である馬車道地区に、これまでにないスタイルの大学院建築都市スクールを開設したい、との相談が横浜国大から持ちかけられた。市では古い民間ビルだったが、条件に合う物件を紹介、そこを学生たち自らが改装して、19年4月、開設した。

YIGSAでは、「横浜」という都市をテーマとして現代都市の課題に実践的に取り組むこととし、山本理顕氏をはじめとする4人の著名な建築家が教授として少人数の学生と共にプロジェクトを実施、地域での活動を重視している。これまでの実績として、東横線跡地の活用の検討や急な坂スタジオの改修、後述する黄金町の高架下スタジオの設計など、市や他の拠点との連携が実践されている。

⑥ 創造界限形成の効果Ⅱ 経済波及効果は約120億円

これまで述べてきたように、バンカート事業を皮切りに、着実に創造拠点が集積され創造界限は拡がりを見せている。アーティストやクリエイターが集積され、新たなシヨップが増え、地域とコラボした事業が展開されるな

ど、まちは活性化されている。そして、これを証明する一つの指標として、経済波及効果を紹介しておきたい。平成16年2月から平成19年3月までの約3年間で、創造界限形成における経済波及効果は120億円、今後も年に60億円以上の効果が期待できるという調査結果を得ている。

3 アーティストやクリエイターの活動支援「アーツコミッション・ヨコハマ」の設置

前述の万国橋SOKOの例に代表されるように、アーティストやクリエイターの集積を図っていくためには、コーディネートや相談といったソフト部分の環境整備も非常に重要な役割を果たす。

創造界限の広がりと同時に、アーティストやクリエイターが横浜に関心を示すようになり、「横浜で活動したいがよい場所はないか」といった相談を多く受けるようになった。これまで、芸術文化振興財団を中心に区民文化センターでも、芸術文化活動に関する相談には応じてきたが、アーティストやクリエイターの活動を全面的に支援する、何でも問合わせに応じる組織を創り、クリエイティブシ

ティ横浜の取組をより一層明確に打ち出していこうということから、19年7月に設置されたのが「アーツコミッション・ヨコハマ」である。

「アーツコミッション・ヨコハマ」は、①情報提供、相談、滞在支援等により、アーティストやNPOの核となる人々の活動をサポートする。②アートの現場をむすび、まちと人とアートのネットワークを生み出す。③将来の創造の担い手となる人材の活動を支援する。④アジアを軸にアーツコミッション・ヨコハマのつくりだすネットワークを海外にまで広げる、という4つの活動指針を掲げている。

20年度から、クリエイター立地促進助成制度や先駆的活動助成などの助成制度も横浜市中から移管し、アーティストやクリエイターの活動支援をここで集約している。今後もクリエイティブシティの中心的機能として活動していく。(注4)

4 創造界限の形成はまちを変えられるのか？初黄・日ノ出町地区での取組み

文化芸術の力でまちの再生は図れるのか。その答の一つ

として、初黄・日ノ出町地区の取組があげられるのではないかと考えている。

① アートでつなぐ、黄金町バザール

この秋、初黄・日ノ出町地区で「黄金町バザール」という事業を実施する。この「黄金町バザール」、事業名を聞いただけでは、何だか分からないと思われるだろうが、地域とアートの共存を目指したこれまでになくないプロジェクトと言えるだろう。

初黄・日ノ出町地区は、約4年前までは250軒を越える特殊飲食店が立地していたが、17年1月の県警の集中取

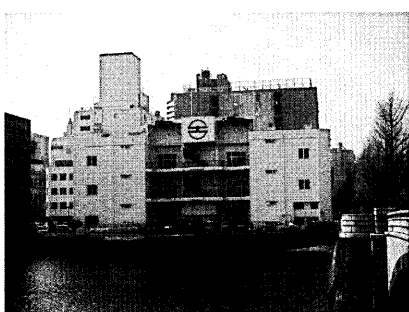


写真7 万国橋倉庫全景

(注4) 「アーツコミッション・ヨコハマ」については、「⑦④アーツコミッション・ヨコハマとは何か」参照

締（バイバイ作戦）により違法営業はほぼ一掃され、地元、警察、行政が一体となった新たなまちづくりに取り組んでいる。その結果、閉鎖状態の空き店舗は150軒余にまで減少した。しかし、残念ながら、いつ違法営業が復活してもおかしくない状況であることは否めない。そのため、今でも県警の24時間の警備体制が敷かれている。また、同時に、この地域だけが周りから孤立して空洞化してしまったかのような印象を受ける。こうしたまちを変えていくためには、新しいまちのイメージが必要である。そこで、「黄金町バザール」を契機とした、文化芸術の街としての取組が始まった。

当初は「横浜トリエンナーレ2008」の開催に合わせて、アートフェスティバルを実施し、多くの人にこの街を訪れてもらい、この街のことを知ってもらおう、ということからスタートした。地元の方や大学、行政、専門家による実行委員会を設置し、キュレーター（注5）らによる企画委員会を中心に、どのような内容にするか何度も議論を重ねた。

その結果、今回のイベントは、①アートという枠にこだ

わらない。②地域の人たちに分かりやすいものにする。③将来のまちの様子をイメージできるものとする。といった、コンセプトで実施することになった。単に、アートの展示

だけではなく、本来、街にあるべきショップやカフェなどが軒を連ね、そこに多くの人が訪れ、笑顔があふれ、賑わいが生まれる。そんな普通の街を予感させるような場をつくりたい、との思いから「黄金町バザール」と名づけられたのである。

ともすれば、黄金町の昔のノスタルジーを残すことがアートだと主張する人もいる。しかし、実行委員会では、それは絶対やめようと決めた。地域の皆さんが昔のイメージを変えたいと思っている気持ちを最優先にしたいと考えたからだ。

② まちが変わってきた

開催を決定してから1年半、地域の人たちとたくさんのお話をする中でまちが少しずつ変わってきた。

当初、地元のまちづくり協議会で、「トリエンナーレに合わせて、現代アートの展覧会を行います。これによって、賑わいのあるまちづくりを進めていきます」と言っても、

地域の皆さんは、「？」だったに違いない。

そんな中、今回新設した京浜急行電鉄の高架下スタジオ2箇所の設計を、それぞれ横浜国大大学院、神奈川大学大学院の学生が地域とワークショップを行いながら進めたり、大岡川桜まつりに参加してプレイベントを協力しながら実施したりしていくうちに、この取組は、まちを変えていく大きな力になるかもしれない、と地域の人たちも思い始めてくれた、と実感している。そして、「まずは、『黄金町バザール』を皆で成功させよう」と口々に言っただけのように

も当然ある。地元の方から、「せっかくの機会だから黄金町バザールの開催と連動させて地元商店の活性化も行いたい。バザール来場者へのサービスクーポンなどを発行できないか。」との提案を受けた。そこで、会場マップに特別サービスを提供してくれる店名を載せ、このマップを見せればサービスを受けられるというしくみをつくった。これで周辺の店舗に呼びかけをしようとなったとき、参加を希望してきた店を全部掲載するか、という問題が発生した。

すなわち、まだ、実は違法な飲食店かもしれないと思われるような店もあるなかでその判別をどのようにしたらよいか、ということである。警察、地元の方を交え相談した結果、今回の企画は、町内会との協力で町内会に加盟している店にしようということとなり、実現にいたった。

私は、ここで大事なのは、難しい問題があるからやめておこう、というのではなく、地元の皆さんと話し合っただけのようでしたら実現できるのかを考えていくことだと思

う。そしてこうしたい一つひとつがまちを変えていくのだと思う。

③ 終わりがスタート

この調査季報が発行される

頃には既にはじまっている「黄金町バザール」だが、開催自体の成功を目的とする一過性のもではない。81日間の「黄金町バザール」が終わったときそが始まりなのである。

皆さんも是非「黄金町バザール」に足を運んでいただきたい。そして10年後のこのまちの姿をまた見てほしい。創造界隈の取組が実を結び、必ずまちを変えられることができていると私は確信している。

(注5)

博物館・美術館などの、展覧会の企画・構成・運営などをつかさどる専門職。また、一般に、管理責任者。もともと欧米の美術館で作品収集や展覧会企画という中枢的な仕事に従事する専門職をいい、日本の「学芸員」よりも専門性と権限が強い。

※黄金町バザール開催概要

	<p>会期 20年9月11日(土)~11月30日(日) (81日間、会期中無休)</p> <p>時間 11:00~20:00 (一部18:00終了)</p> <p>入場料 無料(一部有料イベントあり)</p>	<p>会場 京急電鉄「日ノ出町駅」と「黄金町駅」の間の高架下新設スタジオ、大岡川、周辺店舗ほか</p> <p>内容 参加アーティスト・ショップ、全29組、5カ国。ファッションブランド「the ISSEY MIYAKE」とアーティスト田宮奈呂がコラボレーションした期間限定の「the ISSEY MIYAKE」がオープンするほか、大岡川を舞台にした大規模なインスタレーション、家族の記念日の記憶や人々の絆の記憶を残してきた、かつての街にもあった写真館を再現する、等。</p>
---	--	--